

読み聞かせにおける読み手の内的体験

初等教育科 谷川友美

要 旨

本研究の目的は、親子の関係性に注目して読み聞かせにおける読み手の内的体験・子どもとの関係性を明らかにし、絵本の持つ特徴と援助の可能性を考察することとした。対象は、A県B市にある公立K小学校で読み聞かせボランティアとして実働しているボランティア団体に所属する保護者であり、研究方法にはエスノグラフィーを用い、データ収集には半構成インタビューを中心に行った。分析は文脈に沿って意味の了解可能な単位を基に、意味・関係を考えカテゴリーを組んだ。読み聞かせにおける内的体験は、読み聞かせを「聞いてくれている」と捉える成功・肯定的体験を語る内容と、「聞いてくれない」と捉える失敗・否定的体験を語る内容に分かれた。読み聞かせの特徴を活かして、読み手の読み聞かせに関する背景や経験を成功・肯定的な思い出に上書きできる支援は有用ではないかと考察できた。

1. はじめに

子育てしにくい時代と言われる現代、親子の触れ合い、他者との触れ合い等、子どもと人をつなぐ役割としての絵本の読み聞かせが注目されている¹⁾。2000年からは子育て支援として乳幼児健診の場で絵本を手渡す「ブックスタート」が導入されている¹⁾。

読み聞かせに関する先行研究では、すらすら読むことが出来る頃までは（小学低学年頃）読み聞かせを行う事が望ましいとされ²⁾、小学校でも多くの読み聞かせボランティアの方々の協力により、取り組まれている。物語と絵から構成される絵本は、子どもと大人の間で交わされる言語的コミュニケーションだけでなく、スキンシップや指さし、視線を合わせるといった、非言語的コミュニケーションをも引き出すことも明らかになっている。1970年代、集団読み聞かせを行った対象児の言語的応答や発話内容の分析に重点が置かれ、読み聞かせに関する研究が進んできた経緯がある。1980年代に入り、絵

本を媒介とした親子の反応分析や相互の働きかけや応答関係を分析する研究が盛んになってきた³⁾。理論的基盤に関する研究には、体験話法や直接話法・間接話法の特徴を明らかにした文献⁴⁾、体験話法の意図や読者に及ぼす作用を明らかにした文献⁵⁾、語り技術（共体験、直接知覚、視点誘導、地の文との間の時制の無段差、心的距離の置換等）の作用の有用性に関する文献⁶⁾、Skalaの存在や表現のVarianteの存在の意味を明らかにした文献等は比較的多く存在する⁵⁾。

また、河合は⁷⁾、読み聞かせは物語が多くのもをつなぐ機能を持っており、ある個人の意識と無意識の関係の回復という点で、心理療法において重要であるとしている。松瀬⁸⁾は、絵本の読み語りを子育て不安や不登校の親子の関係修復に役立てる試みを行っている。入院中の子どもの心理ケア等、実践に基づく研究も2000年に入って行われている⁹⁾。

近年、スキンシップや視線、指さしを通して

共有するといった子どもと他者（親・保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・看護師・心理士等）の「つなぐ」体験が重視され、読み聞かせは人と人の関係性の観点から子育て支援としても有益とされている。読み聞かせに対する他者（親・保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・看護師・心理士等）の考えや実態調査は行われている¹⁰⁾。しかし、読み聞かせの中で生じる読み手の内的体験、また読み手と子どもの関係性を明らかにする研究は少ない。そこで、本研究は、親子の関係性に注目して読み聞かせにおける読み手の内的体験・子どもとの関係性を明らかにし、絵本の持つ特徴と援助の可能性を考察したい。

2. 研究方法

1) 研究デザイン

研究方法には、文化を記述する研究手法であるエスノグラフィーを用いた。Spradleyは、文化とは経験を解釈して行動を生み出すために、特定集団の人々が身につけている知識であると定義している¹¹⁾。本研究は、A県B市にある公立K小学校で読み聞かせボランティアとして実働しているボランティア団体（主にK小学校の保護者で結成された団体）に所属する保護者である。彼らは、読み聞かせという経験を共有している特定集団である。その特定集団の人々に共有する経験の解釈として、本研究では読み聞かせの意味とそれらに基づく行動のパターン、すなわち、文化としての彼らの捉える読み聞かせを記述しようとするものである。

2) 対象者

A県B市にある公立のK小学校で読み聞かせボランティアとして実働しているボランティア団体（主にK小学校の保護者で結成された団体）に所属する保護者7名

3) 研究方法

研究の行程は、Spradleyの提唱する理論を参考にした。データ収集は、研究参加者へ読み聞かせについての半構成的インタビューを中心に行った。大森は、「研究の初期の段階では、見知らぬ人である研究者に、人々は表向きの対応をし、研究者を試すこともあるため、ローカルな真実の情報を知らせているか是不確かである。しかし友人としての信頼関係が出来ると、現実のローカルな世界が研究者に開かれるようになる」という¹²⁾。よって、研究者は読み聞かせボランティアの団体に所属し、友人としての信頼関係を築いた。そして、エスノグラフィの研究課程モデル¹³⁾に自分自身の体験を照らし合わせながら、データ収集を開始する時期を判断した。具体的には研究対象の集団に接近する際、その入り口を提供するK小学校の教員や先にいるボランティア団体の人々との心理的な障壁を取り除く為、観察した事柄や歴史的資料などの既存の資料から得た情報を提供し、その情報の確認のための時間を継続して共有するようにした。このような継続的な時間を経過し、日常のありのままの情報が提供され始めたとき研究者は捉えはじめる。その時期を見定め、研究参加者に対しインタビューを開始した。

研究参加者には、「読み聞かせを行おうとしたきっかけは何か」「読み聞かせをすることは（研究参加者にとって）どうか」「子どもへの想いは何かあるか」等読み聞かせや子どもについての回答に制限を設けず問いかけ、自由に語ってもらった。インタビュー後に、分析内容の妥当性の確認を行った。インタビューの内容は、その場で参加者本人の了承を得て録音し、事後に書き起こしたものをデータとした。また、インタビューの際に観察した事柄や、読み聞かせの会が発足した歴史などに関する調査報告書や白書、歴史的文献などから得られた関連情報についてもフィールドノートとして書き出し、イ

インタビュー内容の裏付けとして分析に用いた。データ分析は、文脈に沿って意味の了解可能な最小単位の文節を取り出し、それらの意味の領域を把握した。次に意味関係に基づいてカテゴリーを組み、構造化しながら、カテゴリー内とカテゴリー間の関係性を類似性と相違性によって対比させた。さらに構造の組み直しを繰り返し、統合を進めた。このプロセスから、K小学校で読み聞かせボランティアとして実働しているボランティア団体に所属する保護者7名にとっての読み聞かせや子ども関係性を抽出した。テーマに沿った読み聞かせや子どもの関係性を表象する内容、その理由や背景、それを可能にする手段に着目してストーリーラインを明確にし、カテゴリーを再統合した。

データの収集期間を通じて、研究対象者のボランティア団体の歴史的・経済的背景や慣習等社会的文脈を理解するために、K小学校の教員から助言を受けた。分析結果については、研究参加者から読み聞かせ及び子どもの関係性について十分に表していることの承認を得た。

研究参加者には、文書と口頭で研究の主旨を伝え、匿名性の保持と目的以外にデータを使用しないこと、回答の部分的な拒否や中途でも参加を拒否する権利の保障について説明した。その後、研究への協力参加の意思を確認し参加の了承を得た。

本文は個人の特定を避けるため、話の筋を変えずにデータの一部に修正を加えた。

3. 結果

1) 読み聞かせにおける読み手の内的体験

読み聞かせをしてみたの感想として、研究対象者の開口初めは、子どもが聞いてくれるか聞いてくれないかという状況について語ることが多い。その語りの中に、大きく分け「聞いてくれている」と捉えた成功・肯定的体験を語る内容と、「聞いてくれない」と捉えた失敗・

否定的体験を語る内容に大きく分かれた。

「私にとって、なんていうか安定させられる安定剂的な存在です」という心性を顕にした言葉のように、楽しいと感じながら読みかせている対象者が多く、対象者自身が落ち着ける場所と時間と捉えていることがあった。参加者の読むフレーズやイントネーションを真似するなど再現する子ども達も観察された。一方、対象者が「きいてくれない」と感じていることも多く、観察者から見ると楽しそうに聞いており、対象者には実際の子どもの姿とは異なる形で子どもを捉える傾向が見られた。子どもたちが「きいてくれている」と語る対象者も「きいてくれない」と語る対象者も、子どもたちの様子には大きな変化は見られないことも明らかになった。

「自分が読んでもらった嬉しかったことをしてあげられる喜びがある」、「絵本を子どもに読み聞かせすることで母親になったと実感する」「子どもに返れる」「子ども時代に読んだ本を再発見・追体験ができる」と言う言葉のように、読み手として読み聞かせをしながら、子ども時代の親に自分を重ね合わせ、また子どもに子ども時代の自分を重ね合わせ、楽しいと感じながら読み聞かせをする対象者も多くいた。一方、子ども時代に絵本に対して肯定的な記憶のない対象者は、上手に読むこと、正確さ、子どもが聞くか聞かないかに注目していた。インタビューでも、幼少の頃の読み聞かせの体験・思い出については「・・・」と返答がなくなった。

4. 考察

1) 読み聞かせを楽しいと感じる対象者の内的体験

読み聞かせを楽しんでいる場合、自ずと対象者の顔は嬉しそうな表情になり、絵本の世界に入り、生き生きと反応していた。その様子をうけて、こどもたちも、質問したり感想を言った

り眩いたり、時には「これもこれも」と指さし自分の気づきを読み手と分かり合おうとコミュニケーションを取る場面もあった。対象者も子どもたちもそれぞれが絵本を通して自己表現すると同時に、絵本の内容に関してやり取りをし、絵本から離れて会話をしたり、顔を見合ったりと人との関わりを楽しんでいた。橋本は、遊びとは「普遍的であり、健康に属するもの」として¹⁴⁾ 大人にとっての「遊び」の重要性を示唆している。多くの子どもたちは対象者が楽しんでいるかを確かめるように顔を覗き込み、笑顔を見せ、読み手が楽しんでいる姿を見て嬉しそうな笑顔が観察された。橋本は、「子どもの遊ぶことと他者の遊ぶこととが重なり合う、この領域に、人生を豊かにするもの“Enrichment”を初めて経験する機会がある¹⁴⁾」としている。読み聞かせは、読み手と言う役割にとらわれることなく、ひととき一人の人として自己表現し、読み手・聞き手両方がそれぞれ世界を楽しむものではないだろうかと考えられる。また、読み手・聞き手両方の遊びの重なりを大切にすることも、両者にとって良い関係性を作り出すことに繋がるように考えられる。また、「自分のお姉ちゃんが母親と同じ読み方をしていて面白い。きっとどこかに残っていてそのままやっているんだと思う。」と話す言葉から、対象者の心の中には親との絵本体験が深く刻み込まれ、親との思い出を基に読み聞かせをしているとも考えられた。柳田は、子どもが母親そっくりに覚えて読んでおり経験がないことはできないと指摘している¹⁵⁾。対象者の心の中では、母親と自分、自分と子どもが世代を超え同一化されて連鎖をなし¹⁴⁾、親が育てられたように子どもを育て、親の未解決の葛藤が見知らぬ子供に伝わる“世代間伝達”が絵本の読み聞かせにおいても生じていると考えられる。絵本体験は記憶として蓄積し思い出として形造られ、想いを子どもへ、さらに次の世代へと伝わるものではないか

と考えられた。

2) 読み聞かせを「(子どもたちは) 聞かない」と感じている内的体験

子ども時代、「本読みをさせられたその下手さが思い出される」としてあまり絵本体験として記憶されていない対象者は、実際の読み聞かせにおいて、子どもが聞か聞かぬかに注目していた。また、離れて行ってしまう=(イコール) 子どもが聞かないという想いを強く感じ、いらだちやさみしさを感じていた。対象者自身が読み聞かせに関して楽しみを見いだせておらず、絵本に集中するか聞いているかに注目していることが明らかになった。楽しんで読み聞かせをする対象者も、子どもが聞かぬかと悔いる対象者も、実際には子どもたちの様子に大きな変化は見られ、対象者自身の体験が子どもと感情に大きく影響を与えているのではないかと考えられた。子ども時代を振り返り語る対象者の言葉から、対象者には、実際に子どもの姿だけでなく、自分の子ども時代や親時代の感情という幾重にも重なったフィルターを通して、子どもの姿を捉えてしまうのではないだろうかと考えられた。また、対象者が絵本体験をどのように体験してきたかが、重要になってくとも考えられる。例えば、あまり本を読んでもらった記憶のない親は自分自身の体験を基盤にすることが出来ないむつかしさが存在し、読み聞かせを親が自分自身の体験として捉えられず、聞いてくれないさみしさや苛立ちが多く生じてしまっていたのである。子ども時代の抱いた陰性感情・思い出と子どもたちが聞いてくれないさみしさが重なり、絵本の体験においてインタビューした際、「・・・」と無言になる場面もあった。このような場面は、対象者が否定的な複雑な想いや葛藤を表現できずにいるのではないかと考える。

3) 読み聞かせが持つ特徴

ページをめくることが、繰り返し読み、始まりと終わりがあることが、絵本の読み聞かせにおける大きな特徴として、対象者たちは捉えていることが明らかになった。安島は、「人間は古来からカイロス（無限の時間）とクロノス（有限お時間）という、2つの異なる時間の中に生きているとされ、時間の限定性ゆえに、人の心の中に生きる時間の無限性に沈む事柄が表現され、人は魂の行こうとする目的方向に向かっていくことが可能になる」と述べている¹⁶⁾。ページを開くとファンタジーの世界が始まり、ページを閉じると絵本の世界が終わり現実へと戻ってくる。ページが閉じるまで絵本の世界が続くという時間の枠が存在し、他の遊びの様に中断されず有限の時間の中で、ファンタジーという無限の時間を最後まで楽しむことができるのである。始まりと終わりがあるということが、読み手と聞き手が独自で作り出す「時間の枠」を作り出しているのではないかと考えられた。

さらに、親は非言語コミュニケーションを読み聞かせの中で自然と行っており、「教室の中で行う読み聞かせは、対象者と子ども達との触れ合い・一体感」として捉えている場面が多く見られた。それらの場面の観察では、ページをめくる際に動く目線、息づかい（呼吸）、体で刻むリズム感が、子どもたちと対象者では共有しており、つながりを感じ共有していることが観察できた。現代、人が「つながる」体験が少ないなどと論じられることが多いが、読み聞かせを行うとつながる体験を数多く体験できると考える。絵本は、1ページずつページをめくるたびに場面が切れ、次のページへとつながっていく。また、絵本を読み指さしや目配りや呼吸のリズムなどは、読み手と聞き手の両者が一つの物や空間や時間を共有し、つながるために役に立つ。それと同時に、全体の中から部分を切り取り絵本の世界の流れを切る働きもしてい

る。視線によるコミュニケーションは、絵本の世界から読み手や聞き手への顔へと視線を移すことによって、絵本の世界から切れ、読み手と聞き手がつながる。一冊読み終わると絵本の世界は切れてしまう。しかし繰り返し絵本を読むことで同じ体験を読み手と聞き手が共につなげていくことができる。このように、絵本の読み聞かせは「切れる」と「つながる」を行き来する体験のように考えられる。切れる体験があるからこそ、つながる体験が鮮明に映し出され大きな意味を持つようになるのではないだろうか。

子どもが（絵本のお話しを）聞かないと訴える対象者は、「聞かない」「(子どもたちがその場を) 離れて行ってしまう」という切れることに過度に注目して、切れることからくる恐怖におびえる、はたまたさみしさを感じるという体験をしていたように捉えられた。苛立ちに発展していくことや絵本の読み聞かせの不得意さを強調していく語りから、そのような対象者に(聞かないという対象者) どのような援助を必要であろうか。

「(子どもたちが話を) 聞く」か「聞かないか」に集中している限り、対象者は絵本の世界を遊びきれない。そうすると聞き手となる子どもたちも楽しむことが出来ないと思われる。そう考えると、対象者たちが絵本を通して楽しく遊ぶ体験をより重ねられる様な援助も有用かもしれない。

5. おわりに

絵本の読み聞かせが持つ特徴「つながる」機会の体験は、読み手聞き手共に触れ合いつながることへの意義も大きいように思う。一冊の本を読み聞かせることにことは、何度も切れてつながる体験ができるため、一番身近で手軽に行える遊びであり、喜びであり、情緒面の成熟も期待できる試みではなかろうか。本研究では、

「聞いてくれない」「離れて行ってしまう」といった事に代表されるようなネガティブな感情や想いの生成の背景を考える良い機会になったように思われた。この研究結果を基に、どのような関わり（支援）が求められるのか、客観的にさまざまな視点から見つめる必要があると思う。

最後に、A県B市K小学校で読み聞かせボランティアとして実働しているボランティア団体に所属する保護者7名には、度重なる調査協力を賜りまして大変感謝致します。

引用文献

- 1) 秋田喜代美, 子どもの発達と本, 2004年, 66, 25, 発達社, 東京, p2-7
- 2) 三宅興子, 絵本ガイドブック, 2004年, 翰林書房, 東京, p53
- 3) 水谷孝子, 育ち合いの場としての絵本の読み聞かせ, 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所紀要, 2002, 4, 武庫川女子大学発達臨床心理学研究所, 兵庫県, p49
- 4) 三瓶祐文, ドイツの子どもの本の体験話法について, 2004, 41, 言語文化, 東京, p95
- 5) 顧那, 自由直接話法と自由間接話法における語り手の視点, 東京外国語大学論集, 東京, p2
- 6) 藤井奈津子, 日本の読み語りにおける読み手と聞き手が作り出す場, 梅花女子大学心理子ども学部紀要, 2015, 5, 東京, p79
- 7) 河合隼雄, 「物語る」ことの意義, 心理療法と物語, 2001, 岩波書店, 東京, p19
- 8) 松瀬喜治, 絵本と心理療法に関する一考察, 佛教大学教育学部学会紀要, 2003, 2, 佛教大学教育学部学会, 東京, p161
- 9) 高橋久子, 親・子ども・子どもの本, 子どもと本の心理学, 大日本図書, 東京, p110
- 10) 秋田喜代美・武藤隆, 幼児への読み聞かせに対する母親の考えと読書環境に関する行動の検討, 1988, 教育心理学研究, 44, 東京, p109
- 11) Spradley J.P. (1980), Participant Observation, 3-13, Harcourt College Publishers, 1980, Florida, p38
- 12) 大森純子, 高齢者にとっての健康: 「誇りを持ち続けられること」農村地域におけるエスノグラフィから, 2004, 日本看護科学会誌, 東京, p12
- 13) 近藤潤子・伊藤和弘監訳Leininer M M, 看護における質的研究, 医学書院, 1997, 東京, p58
- 14) 橋本やよい, 母親の心理療法 母と水子の物語, 日本評論社, 2000, 東京, p16
- 15) 柳田邦夫・鶴光代, 柳田邦夫×鶴光代巻頭対談, 日本心理臨床学会, 2008, 東京, p37
- 16) 安島智子, 遊戯療法を構成するもの, 日本遊戯療法研究所, 2004, 東京, p8